洛友會報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
京都市左京区田中大堰町49
075-701-3164

洛友会会長 松田長三郎先生 追悼号

洛友会会長・京都大学名誉教授、松田長三郎先生には去る平成3年2月16日午後6時37分、享年97歳のご長寿を全うされ御逝去されました。偉大な指導者でありました先生を喪ったことは痛恨に堪えません。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

なほご葬儀は2月19日(財)近畿地方発明センターで行われました。下記に先生の御略歴を記し、御足績を偲ぶ縁といたします。

略歴

○明治26年11月28日京都市に生まれる
京都府立二中→三高→京大
○大正6年7月京都帝国大学工科大学電気工学科卒業
同大学院・恩師青柳栄司先生御指導下・真空放電の現象及びその応用に関する研究
○大正13年2月京都帝国大学助教授
○昭和6年5月文部省在外研究員・独英米に留学・電力応用の研究
○昭和7年7月パリ開催の万国電気会議に日本代表として出席
○昭和9年2月京都帝国大学教授
電燈照明と電力応用(電熱真空工学電気鉄道)担当
○昭和15年照明学会関西支部長
○昭和19年12月帝国発明協会から発明大賞を受賞
○昭和20年4月電気学会関西支部長
○昭和25年3月京大工学研究所長・図書館商議員
○昭和27年10月　工学博士
○昭和28年3月京都科学技術館館長
○昭和30年照明学会第20代会長
○昭和31年11月28日定年退官・名誉教授
○昭和32年4月1日成安女子短期大学学長・学園理事(10年間)
○昭和32年10月エヂソン彰徳会常務理事・京都市ケルン委員会委員長・京都日独協会会長・京都商工会議所国際委員
○昭和37年8月欧米視察
○昭和41年4月大阪電気通信大学教授・相談役(10年間)
○昭和41年8月電気評論社初代社長会長(20年間)
○昭和41年11月正四位勲二等瑞宝章授章(教育・研究業績により)
○昭和44年3月近畿地方発明センター理事長(20年間)
○昭和51年3月大阪電気通信大学退職・名誉教授・同志社大学大学院・金沢工業大学講師
○昭和52年京大電気系同窓会(洛友会)会長現在至る。
○昭和54年6月洛友会(同窓会)の歌・作詞作曲発表
○昭和55年11月28日米寿祝賀記念会都ホテル・随筆集2冊発刊
○昭和58年洛友会創立30周年記念祝賀会開催(会員数六七〇五名)
○平成3年2月16日(土)午後6時37分老衰と肺炎で満97歳のご高齢で京都市でご逝去
○平成3年2月19日(火)午後1時～告別式葬儀・近畿地方発表センターにて喪主松田長生・葬儀委員長大谷泰之副会長・六〇〇名参列

故松田長三郎会長 先生を偲んで

副会長　大谷泰之

前会報に既報の通り松田先生は、去る2月16日夕刻肺炎のため97歳の天寿を全うされ安らかにご永眠になりました。

ご葬儀告別式は2月19日先生が永年理事長をして来られた(財)近畿地方発明センターで、筆者が葬儀委員長、ご長男長生(おさお)氏(立命館大学名誉教授)が喪主として厳(おごそ)かに取り行なわれました。

そこで本号は故松田先生の追悼号として刊行することになり、先生のご家庭におけるご生活などについての特別寄稿や会員から寄せられた先生の思い出等の寄稿を中心とする追悼文と去る6月1日東京で開催された総会の諸報告等を纏(まと)めて刊行しました。尚本号に掲載出来なかった寄稿は、10月号に記載させて頂くことにしました。

茲で、ご多忙中のところで寄稿くださいました方々に厚くお礼申

し上げますと共に、事務局ふ馴れと名簿発行準備等のため若干失礼のあったことをお詫び申し上げます。

扨先生の近況に就いては筆者が既発行会報に断片的に書きましたが、茲では先生の晩年の状況を抜粋、付加して記述します。

先生は昨年11月28日満97歳の誕生日を迎えられ、年末には京都北野天満宮に参詣されたり、今年正月3ヶ日はご家族一同と祝膳につかれる等比較的お元気に長男夫妻と共にご静養中でした。

ところが1月4日から俄に老衰が進み病床にふされ、中旬頃から意識障害も起り、1月21日京都の富田病院に急拠ご入院になり、以来危篤状態が続いておりましたが、ご家族の昼夜交代の手厚い看護の甲斐もなく、遂に2月16日夕刻に永眠になりました。

1月4日と言えば例年京大本部で開かれる名刺交換会（全学教職員の簡単な新年会）に先生は常にご出席になり、一昨年の新年会では都合により先生に乾杯の音頭を取って頂いたところ、先生は従来最後の萬歳三唱をやってくださることになっていた事もあって、流暢に先づ乾杯の辞を述べられた後、萬歳三唱をされました。全員は一寸驚いた様子、しかし今日はこれでお開きになり、短時間で終了したと引きあげる連中も多いと言ったことがありました。尚当日引き続いて母教室で行われた教職員の新年会で、筆者がそばでご注意申し上げたところ、先刻の話も忘れておられたご様子、しかし今度は行届いた乾杯の音頭を取って直ぐお帰りになりました。その節ある他教室の新年会では松田先生を似ねて乾杯と萬歳を同時にやって途中のスピーチをやらなくてすんだと話していた長老名誉教授の話を思い出しました。

余談はさておき、昨年の先生の誕生日にお訪ねした節、筆者が「もうすぐ一〇〇歳になられますね」とお話すると、先生は「皆がそう言ってくれるが自分は一〇五歳を目標にして頑張れば何とか一〇〇歳までは行けると思う」と語っておられた。

先生は常に目標を高く大きく持ち、その目標に向かって努力を続けることを人生の信条の一つとしておられた。先生が多年発展に尽粋された照明学会（先生は既に昭和30、31年会長）の創立50周年記念事業の募金に関しての思い出は、その2年前の創立記念会の席上、事務局の一千万円の募金目標に対して一億円募金を提案され、出席者一同皆いささか驚かされた様子、幸にその当時の役員（含筆者）の配慮で五千万円を目標に決定し、更に翌年の役員関係一同の大変な努力で何でも八千万円位の募金額を達成したことも思い出となりました。

先生はまた夢と希望を持つことも信条の一つとしておられた。その一例を述べると、先生の米寿記念随筆集にも記載されていますが、昭和40年頃に感覚エレクトロニクスと言う未来的な新分野の基礎的研究の重要性を唱えられ、視聴臭味触覚と第六感を含む人間の感覚は人間の脳と電気の関係を研究し、電気的刺激を用いて、人間の感覚器官を通さないでも知覚出来るのではないかと考えられ、今後の研究者によって何日の日にか、これが実現されるとその成果によって、世の不幸な人々の福音になることを期待していると昨年も話しておられた。この技術こそこれからのコンピーター技術の未来を示唆する全く超先端的な研究開発目標そのものであって、既にある程度研究が進み始めていることを知って昨年嬉しいことだと話しておられた。

尚令息夫婦も「父は常に夢と希望を持っていたからこそ今まで長生きできたと思う」と話しておられた。

昭和37年頃当時成安女子短大学長として世界各国へ旅行され、滞独中、丁度ドイツ照明学会の創立50周年記念式典に招かれ、その席上流暢なドイツ語（先生は助教授時代ドイツに留学された）で、当時既に東西に分離していた両ドイツが統合され、両ドイツの会員が一同に会して共に祝う記念式の早からんことを期待している旨、即席的スピーチをされたことがあり、現状を考えると誠に感慨深いものがあると昨年も語っておられた。

また大正2年に故青柳栄司先生が母教室で創刊された全国的規模の学術雑誌「電気評論」の編集刊行の中心として、先生は努力され、更にこれを引継いだ（株）電気評論社の設立発起人、初代社長としても10数年尽粋され、多数の巻頭言、随想等を執筆され、現在まで会長を務めておられた。（筆者は先生に引継いで現在社長として勤務中）

この様に先生は専門分野はもとより広く内外の政治経済社会教育などを論じられ、世相文化を語られ、そのご観察眼は鋭く、ご見識も高く、常に深く教えられるものが多くありました。葬儀当日の洛友会代表としての芦原義重氏（大正13年卒）の弔辞にも先生は予て「芸術の価値、科学の価値は、万人の利益のための私欲のない奉仕である」とのラスキンの言葉を語られていましたが、先生のご生涯こそ、その実践そのものでありました。

先生は洛友会会長として約15年の長きにわたって洛友会の発展に尽力されましたが、先生自身の作詞作曲になる洛友会の歌（現在ピアニストとして活躍中の令嬢杉田芳子さんも作曲に協力された由）を何時の会合でも先導して歌われた先生の若々しいテナーのお声とお姿が昨日のことのように目に浮かびます。

また先生はテニスや水泳をたしなまれ（先生の水書も有名でした）特に90歳近くのお年でよく海水浴に行かれた。

先生はその他仲々の達筆家で多くの随想評論説をお書きになりました外、多くの書、墨彩画、水彩画を残しておられる。

愈々今年は白寿のお祝いをしようと会員一同も楽しみにしていましたが突然のご他界により叶わぬことになりました。

以上先生の多くのエピソードの一部を記述しましたが茲に先生のご遺徳を偲びご厚恵に心からお礼を申し上げます。

筆者は先生より20歳位年下の現在78歳ですが、先生には約50年間、あらゆる面でご指導を受け、またお手伝い申し上げてきました。今回先生が一〇〇歳を待たずにご他界になりましたことは本当に残念至極でさびしい限りであります。

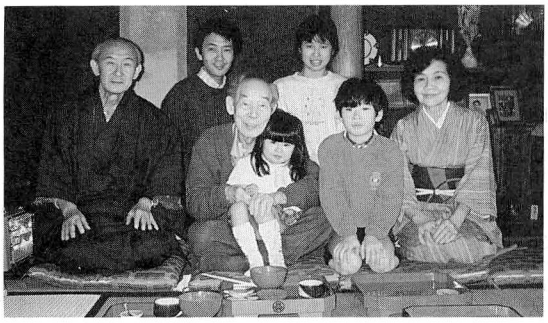
先生永い間色々有難うございました。茲に謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

（平成3年6月16日記）

家庭における父の思い出

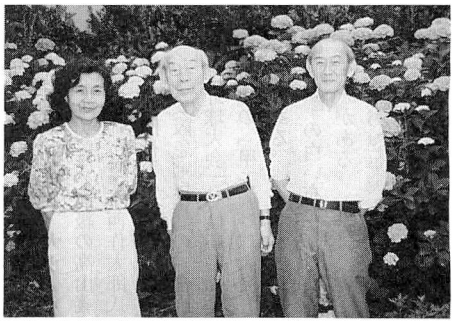
（特別寄稿）

立命館大学名誉教授　松田長生



父の葬儀の日は雪の降る強い風の日でありましたが、早や初夏の候と変わりました。去る5月19日にはお陰を持ちまして宿坊法善寺において納骨の法要を営む事が出来ました。葬儀委員長として御世話になった大谷先生始め関係していただいた皆様にお礼申し上げると共に紙面を借りて父が生前御厚誼を賜りました各位に深くお礼を申し上げる次第であります。

顧みますと父は明治26年の生まれで明治・大正・昭和・平成四代一世紀を生き抜いた事になります。北白川の自宅で始めの頃は家族8人程が一緒に暮らして居りましたが、京大定年退官の年末母が亡くなり妹や長女、長男、次男が次々と他家へ嫁ぎ、独立しますと近年では父と小生夫婦と三人で共に暮らす毎日でありましたが、妹、長女はピアノの縁で毎週一度帰宅しますので曽孫とも一緒に賑やかに食事をして居りました。食事といえば鰻、うどん、じゃこなど好（すき）でないものも色々ありました。若い頃も魚類よりは牛肉が好物で甥の方々と海水浴に行っても魚より牛肉のすき焼きを毎日食べていたという話をして皆を笑わせて居ったものです。



一過性の脳虚血症で93歳の夏富田病院に入院静養する迄は誠に壮健で、例年南紀白浜に三泊四日家族親戚の方々と共に海水浴に行くのが楽しみの一つで、泳法は観海流と聞きましたが達者なものでした。発病後は自宅近くの喫茶店へ紅茶を飲みに行き、週に二回ほど百万遍の治療院へ出かけて行ってマッサージを施して貰い、気が向くと京都ホテル二階のロビーで顔なじみのウエートレスに紅茶を注文して、ゆったりしたソファでいつの間にか午睡している様子でした。その京都ホテルも昨年12月で閉館、改装するとの事で時代の流れとはいえ一抹の淋しさを感じます。京都大学には永年奉職させていただいた事で深い愛着を持ち、退官後も一木三水会と名ずけて名誉教授の先生方と週に二回お話の集まりを楽しんでいた様ですし、新年の名刺交換会や卒業式入学式には家族の者は忘れていても出席する有様で昨年正月の名刺交換会も小生が同行参列させていただきました。極めて異例の事で大学にはご迷惑をかけていたのではないかと思いますが、93歳の春まで同志社大学の大学院に非常勤講師として出講して居り、一時期補聴器を使用した事がありますが、目は極めて健全で眼鏡なしで新聞など不自由なく読めましたので、講義の準備に電気評論電気学会誌、照明学会誌など目を通しプリントを作って学生諸君に渡していた様です。つれづれに書、画、短歌など楽しんで居り、大文字山、雲の朝夕の色のうつり変わりや花のスケッチをし、今年正月に入って墨書の年賀状を少しばかり投函しましたが絶筆となりました。最も気に入っていたと思はれる短歌に「道も狭に椿の花の散り布きてあゆみためろふ八幡神山」というのがありますが元気な頃石清水八幡宮に参拝の折（ぎ）、詠んだものです。最近にはレーザーディスクのヨーロッパの風景をみながら50年程前のドイツ留学当時の思い出を色々話して呉れました。

岳父慈父を失った悲しみは大きいものですが、天寿を全うさせていただいた事を感謝致します。

松田先生の思い出

田中卓次（大15卒）

洛友会会長松田先生は2月16日97歳のご高令で天寿を全（まっと）うされたとは申せ、尚より以上の長寿の記録を願っておりましたのに、白寿を目前にして御逝去された事、誠に残念であります。衷心より御冥福をお祈り申し上げます。

先生は鳥養先生亡きあと、洛友会会長として、会の運営にあたり、各支部を精力的に訪問し、会員の親睦につくされました事、厚く御礼申し上げます。

私の学生時代は60年余年前で、当時の思い出は殆ど記憶に残っておりませんが、卒業後クラス会、14日会等で度々お目にかかってお

りますので、その折々の思い出を順序不同で記します。

昭和36年5月7日に初めて夫婦同伴の京大14日会（大正14年15年卒合同クラス会、夫人20名参加）を熱海の大観荘で開催した折り、先生は岡本先生と共に御来席頂きました。

次に昭和55年10月21日京都岡崎の旅館八千代における14日会にも羽村先生と共に出席頂きました。その節兼ねて先生の作詞作曲による洛友会の歌のテープを作製、当日開会前に全員（夫人15名参加）歌の予習をし、開会後全員合唱した。先生に大変喜んで頂きました。

その前、昭和44年5月26日に京大信友会で松田先生共7名、神綱電気伊勢工場、鳥羽工場を視察して頂きました。翌日は志摩波切方面にご案内して、先輩の方々と同席して楽しい一日を過ごした事があります。

京大信友会の方々（敬称省略）

大正6年卒　松田長三郎
〃　上林　一雄
〃　保寿　康家
〃　光野　重成
大正7年卒　間崎　龍夫
〃　宮崎佐加枝
大正8年卒　高見　祥平

次いで大阪における拡大14日会では、関西電力のご好意により、春秋2回の見学旅行を開催して頂いておりましたが松田先生に御参加頂いたものは次のときです。

一、昭和55年10月5・6日
人形峠の核燃料開発事業団の動力炉と鳥取大学農学部の砂丘利用研究施設
三朝温泉泊

二、昭和56年11月5・6日
関西電力御坊火力建設所、関西電力潮岬風力発電の概要
勝浦温泉泊

三、昭和58年11月7・8日
関西電力奥吉野発電所（揚水式）十津川温泉泊

大鳴門橋たもとにて　S・59・11・2
前列左より2人目・松田先生

四、昭和59年11月1・2日
鳴門大橋完成見学、うずしお見物、洲本泊

以上でありますが、鳴門大橋見学の時は、先生はすでに年令90歳に達しておられるにかかわらず、見学旅行に参加するご気力の上に確かな歩行とご健康の状態に接し敬服した次第であった。

先生のご参加により見学の効果が高められました。先生、色々と有難うございました。お静かにお眠りください。合掌。

松田長三郎先生の追悼

小宮義和（大15卒）

松田長三郎先生の御逝去を聞いて、その悲しみの中に追悼文のご依頼を受けこの文章を綴った。

先生は京二中（現在の鳥羽高校）三高・京大で、私の10年先輩です。先生が京二中の五年生、大正4年（一九〇五年）8月、同級の高山義三氏（後の京都市長）小西作太郎氏（後の朝日新聞社役員）等が「豊中グランド」（阪急宝塚線）の「全国中等学校野球大会」で優勝した。これが現在の「甲子園野球大会」の起こりである。いまでもテレビに「優勝旗」の白い布に「京二中」の写ることがある。

この優勝の翌年大正5年（一九一六年）4月、私も京二中に入学した。私の学んだ小学校は、男山八幡宮の麓、八幡小学校。4～6年まで3年間担任の築山新三先生が、ずっと後で、松田先生と同級と知った。

また、当小学校で同級の田中教子さん（男山八幡宮の宮司令嬢）が、後年松田先生夫人となられた。岩清水八幡宮の参道に、松田先生の歌碑が建てられたことを知り、いづれも縁があったと思っている。

私が京大入学当時の教官は、青柳栄司、本野亨、清水義一、鳥養利三郎、岡本赳の5先生が教授、加藤信義、井上昇の2先生が助教授、そして松田先生と阿部清先生が常勤講師であった。松田先生のご任官時期は知らないが、3年生の時に「ダイナモ」と言う電動機にも発電機にも使える回転機を使っての「強電流実験」で松田講師のご指導を受け、兄貴のような親しみを感じた。

青柳先生や石川芳次郎氏（京都電燈社長）等の「発明奨励の会」（科学技術館後に近畿地方発明センター）を松田先生がご協力されたことをずっと後で知った。

私は永い間、営業技術畑で活躍したが酒は飲めず、小唄、碁、ゴルフの3ゴも不得手「祇園見物」など思いもよらぬ話であった。唯一度だけ故日立造船社長にお伴して、花見小路の「松の井」と言うお茶屋にいったことを思い出した。

その頃の祇園は、芸妓の置き屋、宴会等を斡旋するお茶屋、そして岡崎のつる家、東山の平野屋、八百政等の料亭と三つの専門分業で、この三者が宴会を作り上げて運営していた。その「松の井」へ先生をお連れして「一力見物」を頼み、希望にそうことができました。余談ですがずっと後に、京舞（地唄舞）保存の協力を、お得意様から頼まれて「ひさご会」で数回「一力」の座敷に座ったが私は「借りてきた猫」で落ちつかなかった。また三月末の「大石忌」「千利休忌」等に案内されたこともあるが、不粋者の私には祇園はどうもなじみにくい世界だった。

先生がお生まれになって永くお

過ごしになったのは「壬生狂言」「新撰組屯所」で有名な壬生寺の南方、下京区松原通千本あたり中堂寺、その南は島原の廓に接していた。ただし晩年のお住まいは銀閣寺に近い大文字山の山麓、高級住宅地区(北白河下池田町)故大原総一郎氏(倉敷の大原美術館創立者)もここから大阪の会社に通っておられた。

昭和35年頃だったかと思うが、私は入洛の機会に予告なしに、銀閣寺に近い先生のお宅をお訪ねした。あいにく先生はお留守。前もってご都合をお伺いしなかった手落ち、残念だった思い出がある。

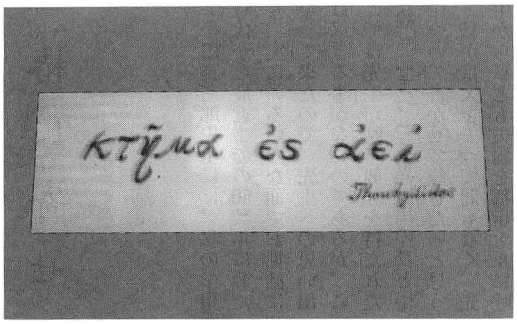
鳥養先生のご臨終の折りは、数日前お伺いして色々無駄話をしたのに比べて返す返すも心残りです。ご近所の方々に、私の訪問を伝えて頂くようにたのんだが、もう少し念を入れておけばよかったと今でも悔まれる。

先生は御長寿に属する。しかしもっともっと生きて頂きたかった。

(91・6・15記)

松田長三郎先生の思い出

青柳健次(昭6卒)



私と松田先生の出合は昭和3年、私が電気工学科に入学した時に始まります。その頃先生は壬生の櫛笥町に住んでおられました。入学のご挨拶に参上したわけでありますが、それ以来今日に至るまで63年の長い間、家族ぐるみお付き合願い、かつ先生からは色々なことでご指導を受けた。その第一は、前述の入学時、ご挨拶にあがったところ、電気の何者か判らぬ私にジェーシェ・トムソンの「エレクトロン」という英文小冊子を、これは私の読みさしであるが君に上げるから読んでみたまえと言われた。電気のでの字も知らず、まして英文で書かれた本、誠に有難かったが、家に戴いて帰り中をペラペラと繰って見ましたが、手におえず匙を投げ、遂に卒業するまで一頁も読みませんでした。誠に申し訳ないことをしてしまった。その頃からもっと力を入れて勉強しておけば、今より少しましな技術者になったと思っています。

その頃の先生は夏休みが来ると、家族中を引き連れて須磨の海岸で一夏を過ごすのが毎年の例でした。海から帰られたら先生は海中で立ち泳ぎで、扇子に字を書いたとか、奥様がおなかの浮袋を取られて溺れかけた等の事を愉快に話して頂きました。当時私は、その様な優雅な生活を大変羨やましく思った記憶があります。

私が3年になった時、松田先生に卒業研究のご指導を受けた。題目は「陰極線オシログラフ」でした。当時私は他の研究をやりたく思っておりましたので、ちょっと不服でしたが、その当時の卒研は教授会の指導で上から決めてくることになっていた。お陰で夏季実習に行った逓信省電気試験所で、当時は珍らしい横河電機製の陰極線オシログラフを扱わさせて頂き、後に出来た電子顕微鏡の電磁電子レンズの原理も修得することができました。

私が卒業した年、昭和6年5月、先生は2ヶ年に渉るドイツ留学の旅に出発された。先生のお話によると、欧州に向う船中で英国の貴夫人と親しくなられ、東洋のプリンスと言われ大変もてたようです。そんな関係でロンドンでは、貴族の豪邸に一泊された由、誠に幸運な留学第一歩であった。しかし時には、命がけでロシアに出かけられたり、相当活躍されたようですが、先生もやはり日本人、帰国時、インド洋を航行中、当時流行の小唄勝太郎の「嶋の娘」のメロディをラジオで聞かれ思わず涙を流したそうです。このことも先生の一面を表しているものです。

しかし先生は非常に豪気なところがお有りで、権威のある先輩に対しても堂々と自説を説き一歩も引かないところがありました。たとえば昭和12年の電気学会大会で、友人上林一雄(大6卒)の説を支持され、阪大の理学部長八木秀次先生と論戦し、満場を湧かしたことなど時々思い出します。

先生はご退官後成安女子短大の学長になられ、そこを退職された後、大阪電気通信大学の顧問教授に就任された。大学には図書館が必要である事を理事会に説き、立派な図書館を作られ、館長になられた。ある日私が図書館に出掛けた時、入り口に先生自筆のギリシャ語の ΚΤῆμα ἐς ἀεί(永遠の宝庫)という額が掲げられているのを発見し、なる程と感心するとともに先生の博学なのに驚いた次第です。

(写真参照)

話は少し外れますが先生の小学生の時のあだ名は「太鼓判」だったそうです。理由は担任の先生が、松田は将来偉い人になる。私が太鼓判を捺すと言われたからだそうです。

ここで私は「せんだんは双葉より芳し」の古語を思い出します。先生は京二中時代マラソンで優勝された由、ここに先生のご長命の鍵を見つけた気がしました。先生は悠々迫らず人生の97歳という長距離マラソンを見事に完走され優勝、天国に昇られたのです。私共弟子に人生の歩み方をご自身の実践を以って示された。誠に有難いことです。どうか先生、天国におられても相変わらず我々をお導きあらんことをお願いします。先生に対する思い出はつきませんがこの辺で終わりとします。合掌。

(写真は大阪電気通信大学教授中野稔(昭24卒)氏の提供された)

椿に寄せて

清野　武（昭12卒）

松田長三郎先生には、私の学生時代から最近までの50数年にわたり、実にいろいろな面でお世話になって来たので、先生への思い出は尽きる事がないのであるが、ここでは先生が晩年興味を持たれた「絵」にまつわる思い出のひとつについて書かせて戴きたいと思う。

私が京大を去って間もなく、先生から私ども夫婦を都ホテルに呼んでいただき、見晴らしのよいテーブルでお昼ご馳走になったことがある。そのとき頂戴した先生のご揮毫「知尚無窮追」はずっと私の書斎を飾っている。

私は後日お礼として、扁額に藪椿のひと枝を描いてお宅にお届けした。それには都ホテルで懐紙にしたためていただいた先生の短歌

道も狭に椿の花の散り布きて
歩たらふ　八幡神山

の一首を拙画横に書いて、お部屋の隅にでも掛けていただければ、という私どもの願いもこもっていたのである。この願いがやがてかなえられたことを承りながら、ご在世中に拝見しないままになってしまったことを、申し訳なくまた残念に思っている。

先生は書道のほかに水墨画にも親しまれ、先生からいただくお便りには草花のスケッチがはいっていたりして、いつも楽しいものであった。また私の個展を第一回（昭54年）から殆ど毎回、熱心にご高覧戴き、ご批評を賜ったことを有難く思っている。最後は第11回（平成元年）であったが、思えばそのとき先生は殆ど96歳になっておられたのであるから驚くほかない。

今年も藪椿が咲きまた散っていったが、松田先生はそれをご覧になることなくこの世を去って行かれた。痛惜の極みである。　合掌

松田先生の思い出

真弓克巳（昭13卒）

初夏の休日、琵琶湖ホテルの庭先。

「オツ！あれは松田先生では」先生の姿を見付けた仲間の一人が叫んだ。

我々はボートを瀬田から漕ぎ出して唐橋をくぐると、目標を何となく対岸のホテルに定め、「周遊の歌」等を高唱しながら湖を横断し、ホテルの砂浜に着岸。まず一服と上陸したところ。

これはクラスマッチの練習で、艇こそ本物だが、2、3人を除いては未経験者ばかりの急造エイト。今思えば血気に任せた乱暴な試漕だった。

先生は一日の静養に見えて居たのか、挨拶する一同に、

「よく来たなぁ、お茶でも飲んで行き給え」

と、気軽に仰言って頂いたが、わが身を顧みると、着たきりのシャツとパンツは汗と波しぶきでズブ濡れの上裸足のままで靴も無い。

いくら厚かましい青年達も、この身なりで一流ホテルでご馳走になるには、かなりの勇気が要った。

私には教室の講義よりも、この時の一杯のコーヒーに、先生の思い出が暖かく疑集している。

50余年の昔、古き良き時代の話…。

松田長三郎先生の思い出

相木一男（昭15卒）

もう20年も前のことになろうか、先生が電気評論の委員会で東京へ見えた折り「先日金沢から帰る途中日本海があまりに美しかったので途中で下車して一泳ぎして来た」とのこと、先生は水泳が大変お得意で立泳ぎしながら色紙に揮毫できると言っておられたが、80歳近いお年で思い切りよく海に入るなんてとても私達にはできるものでないと先生の果敢さに舌を巻いたものだった。

私は昭和12年夏大学2年生の時召集を受け学徒兵として北支に出征、鉄道部隊に配属、中国の各地を点々とし1年6カ月後の昭和14年2月に帰還した。その時松田先生より試験を受けておくよう勧められ友人のノートで俄か勉強して先生の「電気鉄道」と「青空工学」を受験し、3年生に進級することができた。残りの科目は9月と12月に追試験を受けお陰で翌15年3月無事卒業でき、先生のお勧めで当時設立間もない日本発送電会社に入社した。この様に先生には追試験と就職で大変お世話になったが、それにも増して私の出征中の1年6カ月の空白を気の毒に思われたのでしょうか3年生の時の学費を一部援助して頂いたことである。このご恩は生涯忘れるものでない。

その後私は東京に就職したので先生とはとかく疎達になり勝であったが先生が昭和42年に電気評論

社の社長に就任されてより委員会などで再びお会いする機会が増えたことはまことに幸であった。この時先生は成安女子短大の学長はしたが、まさか株式会社の社長になろうとは思わなかったと笑っておられたのが今でも目に浮かぶが、青柳栄司先生の創設された電気評論に対する愛着の念はことのほか強く、委員会には毎回出席され私達の議論を楽しそうに聞いておられたが、これが何時の間にかエネルギー問題や原子力発電、センサ技術等の巻頭言となっていたのには驚嘆したものである。電気評論は昭和63年には早いもので20周年を迎えたが先生はその頃から体調を崩され東京には来られなくなった。先生は吉田山とか鴨川などへの散歩を日課とされていたとのこと、私も何時か鴨川を訪れ、先生が楽しみにしておられたように「ゆりかもめ」にパン屑をやり、先生を偲びたいと思っている。

松田先生を偲んで

珠玖泰吉（昭17卒）

松田先生を偲んで、思い出を記し、御冥福をお祈り申し上げます。

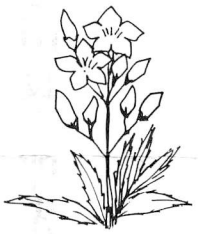
先生は私にとって、大学卒業時の卒論指導教授であり、会社生活での（人生仕上げの）社長・会長でありました。卒論の細かいことは何も頭に残っていませんがテーマは「速応励磁」であったと、はっきり記憶しています。関電在職中は給電を担当、コンサルタント時代は電力系統計画に関係していたので、過渡安定度になると、卒論のことを思い出します。

昭和61年に私が電気評論社に就任した時、蹴上の都ホテルで東山の絶景を眺めながらフランス料理をご馳走になったことがあります。そのとき、先生のドイツ留学途上、船中で、イギリス貴婦人とのロマンにあふれた思い出話を聞き、ワインでほろ酔い、楽しい一時を思い出します。

次に挨拶に関電へご案内した帰り、京阪電車の淀屋橋へお送りした時、独りで思い出の場所を歩きたいので、フリーにさせろと、おっしゃる。足元もやや危なかしいので、心配で無理やり電車でお家までお送りしたこともあった。

鞠小路の「ゆとりろ」という瀟洒な喫茶店が先生のお好みで、似合わしいところでした。しゃれたロマンに満ちた雰囲気で、紅茶をすすりながら仕事の報告をしたことは今も懐かしく思い出します。

また百万遍「ゲート」での新年宴会も懐かしく、よく思い出に残っています。電気評論現社長の大谷先生、取締役の近藤先生、評論社員が集まり、松田先生と楽しく話したことがつい昨日のように感じられます。



松田先生を偲んで

近藤文治（昭18卒）

松田先生が亡くなられて早くも4ヶ月が経ちました。先生の近くにあって洛友会の仕事をずーっとしてきた私にとっては、先生は慈父のような存在でした。特に先生の生家のある中堂寺と、私の生まれた西院とは隣合った土地で、先生の通っておられた小学校に、私の母も学年は違いますが通っていたのです。私が生まれたのは大正9年ですから、先生が大正6年大学を卒業されてから間もなくです。しかも先生のご長男長生さんと、中学校で同窓だったのです。ですから年齢的には正に親子の関係にあった訳です。さらに先生は私の中学校（京二中）の先輩であり、高等学校（三高）の先輩でもありました。もちろん云うまでもなく大学の恩師であり、卒業後も同じ教室にあって、絶えず心温まるご教示、ご鞭撻を頂いたのでした。そんな訳で、京大電気教室という公的機関を介してだけでなく、私的な面でも二重三重に先生とは太いパイプでつながっていたのです。

先生は97才という長寿を全うされましたが、感謝の気持ちに溢れた平静心と腹八分目の節制の大切なことを、長寿の秘訣として説いておられました。「戦中の食糧難の時代に成長期を送った私は、胃壁にプレッシャを及ぼすほど食べないと満足感が得られません。腹八分目は苦業です。何か秘訣は？」と申し上げたら「そうかねえ」と笑っておられました。その声が今も聞こえるような気がします。秘訣の今一つである平静心については、少しでも先生の域に近ずきたいと努めるのですが、凡夫の悲しさ心を乱すことが多く、先生の静かな日々の生活には頭の下がる思いがします。

こんな事がありました。先生が88才を迎えられた年のさる会合のスピーチで、私は先生の米寿に触れた積もりでしたが、ついウッカリ「先生は喜寿を迎えられてもなおかくしゃくとして…」とやってしまったのです。隣におられた先生は私の洋服を引っ張って、「近藤君、米寿だ、米寿だょ」と仰ったのです。私は大変慌てたのですが、「私が米寿を喜寿と間違えるほど先生はお元気です」とその場を繕ったのですが、後で考えてみると、正に言葉の通りであったと苦笑いしました。

先生は洛友会の各支部の総会に、実にマメに出席されたことはよくご存知の通りです。90才近くになってもお供も付けずに四国支部総会に出席頂こうとして、支部からお叱りを受けたことがあり、その後は、私ができるだけお供をするようにしました。往復の車中などで、昔の京都の話をよくされまし

たが、私も純粋の京都人で、古い京都やお寺のことは精通していますので、話し相手には丁度よかったのでしょう。ご子息に対すると同様に気楽に話されていました。それで私ができるだけお供をするようにした次第です。

昭和58年、90才寸前のときに、四国支部総会の翌日、支部のお世話で、四国八十八ヶ所巡りのお供をすることになりました。先生の四国霊場巡りは既に徳島及び香川県両県は終わっていましたので高知へ参りました。納経帳の当時の記録によれば、6月18日に高知県の3ヶ寺と有名な植物学者牧野富太郎博士を記念する牧野植物園を訪ねています。暑い日でしたが、先生はわれわれ壮者(?)を凌ぐお元気さで、お寺の高く長い石段をとっとことっとこ登られていたお姿が瞼に焼き付いています。その他にもう一度、西条市近傍の4ヶ寺にお供したことがあります。その後は私の勤務の関係でお供ができず、霊場巡りのその後をお聞きしないまま亡くなられてしまいました。私は去る6月7日四国支部の総会に出席し、翌日、ご迷惑とは知りながら支部にお願いして、多度津近辺の霊場に案内して頂きました。先生の足跡を辿り、ご冥福をお祈りするためでした。信心深い先生のことですから、同行二人と書かれた納経帳袋を胸に下げ、弘法大師とお二人で(これが同行二人の意味です)、残った霊場を巡っておられることと思います。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

松田長三郎先生を偲ぶ

大嶋幸一（昭19卒）

新春の洛友会報で松田先生のご長寿を寿ぎ、先生のご信条の一つ「目標は常に高く大きく」として百五歳のご健勝をお祈りしておりました矢先、今偲び草の筆を執らねばならぬとは、まことに哀惜に堪えません。2月2日の洛友会役員会で先生のご入院をお聞きし、翌3日の平安神宮節分祭の歳男豆撒き行事で、先生のご快癒を祈願の上、加茂川畔の富田病院にお見舞いに参りました。お付添えのお嬢さんからご容態が思わしくないと伺いましたが、日ならずして訃報に接しました。この日は夕方から雪がちらつき加茂川べりは一面銀世界の清らかな夜でした。心よりご冥福をお祈りします。

松田先生は父と親しく、又壬生中堂寺町のご生家が我家の菩提寺と同じ町内にあり住職から秀才の誉れ高い先生の伝説的逸話を常々お聞きしていたので私には親しみ深く身近な先生でした。

例年お正月の2日に年賀に参上する習わしで、時には会社の後輩もつれて訪れ、先生のご高説をうかがったものです。応接間に和服姿でストーブに薪をくべながら先生独自のあの物静かなゆったりとした口調でその年々の最新技術について語られたものです。40年代のことと記憶しますが情報化社会の魁ともいえる感覚エレクトロニクスの思想を情熱的に語られていたことが鮮やかに蘇ってきます。

先生の話題は技術分野に止まらず、古くは中学生活の思い出、海外留学の船旅のこと、時には美術談義にまで及ぶことがありました。

松田先生は京都府立二中の大先輩で、共に名校長中山再次郎翁の薫陶を受ける幸運に恵まれた私ですが、大正4年夏の第一回中等学校野球大会で優勝し、オープンカーで京都市内をパレードした時の感動、先生より6年後輩の梅原龍三郎画伯(奇しくも松田先生と同じ97歳で天寿を全うされた)の傑作「雲中天壇」「紫禁城」又真赤な噴煙を吹き上げる「浅間」や「北京秋天」の梅原先生独特の赤色(日本の美のふるさとと京都の赤といわれる)に話が及ぶとあの穏やかな顔面を紅潮させて美術談義に花を咲かせられたものです。

先生は同窓会や総会に進んで出席されましたが、二中の総会でも然り、同窓会長平澤興先生と共に校歌「千古変わらぬ王城の……」を合唱、又最長老としてご挨拶されるのが常でした。齢90を超える松田先生の艶やかで朗々たる声音に満場拍手喝采、化物だねとの感嘆の声が囁かれるほどでした。今はその松田先生、平澤興元総長に、再びお目にかかることが出来なくなりました。痛惜の極みです。

松田先生が大正初年海外留学の船旅の途、マルセーユで入手された大理石のヴィナス像が壬生の生家のお孫さん、松田司さんの玄関に飾られています。先生の思い出として懐かしく存じております。以上僭越ながら先生の私的な一側面をご紹介させて頂きました。合掌。

松田長三郎先生を偲ぶ

森井清二（昭24卒）

松田先生が長逝されてから、早いもので四ヶ月になろうとしている。同窓生が長年、ひとしく師父と仰ぎ、更なるご長命をひたすら祈念してきただけに、哀惜の情一入のものがある。

思えば、先生が大学ご卒業70有余年に亘り、学究・教育の道に印

されたご足跡はまことに偉大というほかなく、幾多の先駆的研究をはじめとする輝かしいご業績の数々が、わが国の電気工業の進歩さらには経済社会の繁栄発展に果たした貢献の大きさははかり知れない。

顧みて、先生のご生涯に貫かれた尽きることのない学問的情熱に敬仰の思いを新たにするとともに、とくに若き日に一学生として、このような先生の高邁な文明観や科学技術に対する真摯な姿勢、旺盛な探求心に身近かに触れることが出来た幸せを改めて思い起こさずにおれない。

先生は、学問に関しては自らを厳しく律する妥協のない方であられたが、人に対してはまことに醇厚篤実、茲愛に溢れ、その温かく心豊かなお人柄には誰もが魅了された。講義も当時としては珍しい外国留学のご経験談や機智にとむ話題が織り込まれた興味尽きぬものであったし、学生とも胸襟を開いてお付き合い頂いた。学生主催のダンスパーティに奥様同伴で参加され軽やかにステップを踏んでおられた時のご様子が鮮やかに目に焼きついているが、先生のリベラルなお考えといつも変わらぬ若々しい行動力は当時まことに新鮮に思え、その瀟洒で端正なご容姿とともに今も記憶に新しい。

定年ご退官後も教育に携わられる傍ら、電気評論社の社長・会長として、また本会会長として電気工学界の発展と後進の指導に格別のご尽力を賜ったが、終始心のこもったお仕事ぶりには只々頭の下がる思いであった。

私ども関西電力も、直接先生のご薫陶を賜った者、また本会を通じて先生のご謦咳に接した者が多いが、今後とも電気に大きな夢をかけ、使命感をもって事業の発展を期してまいることが何より先生より賜ったご鴻恩にお報いする道であると思っている。

ご遺徳を偲び、ご生前に賜ったご厚誼に厚く御礼申し上げるとともに、心からご冥福をお祈りする次第である。

松田先生を悼む

金森仁志（昭30卒）

私は学部の特別研究と大学院、合わせて3年足らずの間松田先生にご指導頂きました。当時は満63歳の誕生日に定年退官される規定でしたから、先生は私の修士課程2年の11月にご退官されました。文字通り、先生の最後の弟子となりました。また卒業後も何かにつけて、北白川の御邸宅に伺って、適切なご指導を頂きました。

歴史上の人物は別にして、私の事を存じていてくださる方々の中で、先生は私が最も尊敬している人物です。先生の御人徳については、この追悼号で、多くの先輩の方々が適切に表現されると思いますので、私が特に印象に残っている事だけを簡単に記したいと思います。

第一に、先生はいつも人の努力に敬意を表しておられました。他人を批判されたり、悪口を言われたのを一度も聞いたことがありません。

第二に、先生はいつも時代の先の先まで見透されて、夢を持っておられました。講義（当時はノート講義）の時に毎回必ずノートを読むのを止めて、眼鏡を机の上に置かれ、太陽エネルギーの利用の必要性を熱っぽく訴えておられた事が今でもありありと思い出されます。昭和30年頃は原子力発電の計画が初まったばかりでしたが、先生は先に、原子炉の安全性が問題になる事を見透されて、そのもう一つ先迄考えておられたわけです。その先見の明に対しただ敬服するのみです。また昭和40年代50年代には感覚エレクトロニクスの夢を伺ったことを覚えております。これも21世紀にかけて発展し続ける分野でありましょう。

最後に、先生は御退官直前の昭和31年秋の学園祭で「可能と不可能」と言う題で講演されました。その時に五〇年一〇〇年先のの学問の発展方向の展望を述べられました。世の中は確実にその方向に動いているようです。

先年お見舞いに伺った時に、先生は一〇〇歳以上生きるとおっしゃっていましたが、それを目前にしてお亡くなりになりました。しかし先生は多くの徳を積み、我々凡人の何倍もの活動をされ、学問的にも行政的にも多くの業績をあげられました。実質的に充分に、一〇〇歳以上生きられました。謹んで先生の御冥福をお祈り申し上げます。

総会報告

平成3年度 洛友会総会

平成3年度総会は、去る6月1日(土)午後4時30分より東京目黒の八芳園において、90名参集のもとに行われた。

今年の総会は東京支部と合同で開催し支部総会後行われた。

恒例により議長兼司会は近藤常任幹事で始まり、亡くなられた松田会長のご冥福をお祈りし、全員黙祷を捧げるとともに、開会挨拶も大谷副会長より、亡き松田会長の闊達な人柄、先見性が高かったこと等のお話を伺い亡き人柄を偲びました。次に前田憲一先生(昭7卒)が日本学士院会員になられた。洛友会では鳥養先生だけだったのでこんなお目出たいことはないので祝賀会を開催したかったがご健康上中止となった。今年は会費の値上げ・役員改選等協力願い今後共会員相互の親睦と結束を強調された。続いて同常任幹事より平成

2年度事業報告、平成3年度事業計画、役員改選(別項参照)洛友会運営の健全化(昨今の赤字体質)を計るための会費の値上げについて説明があり、次いで矢木原事務局長より平成2年度収支決算・平成3年度収支予算案の説明があった。以上各案件を審議の結果それぞれ原案通り可決されました。なお平成2年度決算、3年度予算については別表をご参照ください。

引続いて松波教授から最近の大学の近況として、先生がた(林先生、木嶋先生の定年退官、竹田先生の名大への異動他)の異動のお知らせや、最近の就職状況・修士博士への進学状況(博士過程への進学が少ない等)の詳細な報告がなされました。(詳細は会報4月号参照)

平成2年度収支決算

平成2年4月1日から平成3年3月31日まで

収入の部　(単位：円)

科目	決算額	予算額	備考
会費(学部)	7,806,200	7,900,000	
〃(講習所)	381,800	350,000	
預金利子	401,521	400,000	
広告掲載料	130,000	100,000	会報新年挨拶広告
雑収入	2,000	10,000	
収入小計	8,721,521	8,760,000	
前年度繰越金	9,341,030	9,341,030	
合計	18,062,551	18,101,030	

支出の部　(単位：円)

科目	決算額	予算額	備考
名簿編集費	0	0	
電算処理費	0	0	
印刷費	0	0	
発送費	0	0	
会報編集費	0	10,000	アルバイト費
印刷費	1,055,029	800,000	毎号5,300部印刷
発送費	1,630,897	1,600,000	
備品費	0	0	
通信費	138,092	100,000	
会員原簿管理費	647,709	700,000	計算機処理費等
会合費	340,702	400,000	役員会会合費(含旅費)
総会費	320,000	320,000	
集金費	195,621	170,000	振替払込手数料
消耗費	174,472	100,000	
旅費	209,440	300,000	支部総会出席旅費等
懇話会補助金	250,000	250,000	
支部交付金	3,020,300	3,020,300	
事務人件費	960,000	960,000	応研謝礼
雑費	125,750	10,000	会長慶弔費等
予備費	0	19,700	
支出小計	9,068,012	8,760,000	
次年度繰越金	8,994,539	9,341,030	
合計	18,062,551	18,101,030	

平成3年度収支予算

平成3年4月1日から平成4年3月31日まで

収入の部　(単位：円)

科目	予算額	H2年度決算額	備考
会費(学部)	10,000,000	7,806,200	
〃(講習所)	450,000	381,800	
預金利子	350,000	401,521	
広告掲載料	3,500,000	130,000	H1年度決算 3,141,000
雑収入	10,000	2,000	
収入小計	14,310,000	8,721,521	
前年度繰越金	8,994,539	9,341,030	
合計	23,304,539	18,062,551	

支出の部　(単位：円)

科目	予算額	H2年度決算額	備考
名簿編集費	20,000	0	
電算機処理費	450,000	0	H1年度決算 409,633
印刷費	5,000,000	0	〃 4,812,293
発送費	1,400,000	0	〃 1,343,441
会報編集費	10,000	0	
印刷費	1,100,000	1,055,029	毎号5,400部 年4回発行
発送費	1,700,000	1,630,897	
備品費	0	0	
通信費	200,000	138,092	
会員原簿管理費	700,000	647,709	計算機処理費
会合費	400,000	340,702	役員会会合費(含旅費)
総会費	300,000	320,000	東京支部渡し
集金費	200,000	195,621	振込手数料
消耗費	200,000	174,472	
旅費	350,000	209,440	支部総会出席旅費等
懇話会補助金	250,000	250,000	
支部交付金	0	3,020,300	
事務人件費	1,200,000	960,000	応研謝礼
雑費	10,000	125,750	
予備費	820,000	0	
支出小計	14,310,000	9,068,012	
次年度繰越金	8,994,539	8,994,539	
合計	23,304,539	18,062,551	

預金及び現金　平成3年3月31日現在

普通預金	1,559,394	郵便振替	445,715
定期預金	6,900,000	現金	89,189
当座預金	241		
		合計	8,994,539

平成3年5月11日、応用科学研究所において、領収書、帳簿等関係書類を慎重に監査し、支出及び決算が適正であると認めました。

木嶋　昭

会員の皆様へのお願い
会費の値上げについて

洛友会では、過去10数年間にわたって、会費を本部会費二三〇〇円、支部会費七〇〇円合計三〇〇〇円に据えおいたままで今日に至りました。比較的物価が安定していたとは言え、このように長い間会費を値上げしないで押し通せたのは、応用科学研究所や会員の皆様の絶大なご協力と関係者の努力の賜であります。しかしそれにも限度があり、既に限界に達していると思います。このことは、昨年度および本年度の2年度にわたって、本部の収支決算は赤字が続いています。その原因を詳細に検討した結果、赤字体質は容易に解消できる性質のものではなく、残念ではありますが、会費の値上げに踏み切らざるをえないと判断いたします。このことは支部についても同様であります。

このような現状にかんがみ、左記のような会費値上げを総会に提案し決定した次第です。

現行三〇〇〇円の会費を四〇〇〇円に値上げする。内訳は

本部会費　現行二三〇〇円を三〇〇〇円に値上げ

支部会費　現行七〇〇円を一〇〇〇円に値上げ

何卒ご協力の程よろしくお願い申し上げます。7月号会報より振込用紙を添付いたしますのでご送金ください。

洛友会役員
改選について

6月1日、本部総会において左記のとおり改選されました。退任(退)及び新任(新)の役員名は次の通りです。(任期は2年)

記

会　長　大6　松田長三郎(死亡)
会長代行　昭13　大谷泰之(新)
副会長　大13　芦原義重(退)
　　大13　本多静雄(退)
　　昭2　真田安夫(退)
　　昭5　金井久兵衛(退)
　　昭5　河本勝寿(退)
　　昭6　上西亮二(退)
　　昭13　大谷泰之(現)
　　昭18　近藤文治(新)
　　昭27　林　宗明(教室・退)
　　昭28　卯本重郎(教室・新)
　　講大10　越坂延夫(現)
顧問　大12　渡部兼雄(現)
　　大13　芦原義重(新)
　　大13　本多静雄(新)
　　昭2　真田安夫(新)
　　昭5　金井久兵衛(新)
　　昭5　河本勝寿(新)
　　昭6　上西亮二(新)
　　昭7　前田憲一(新)
　　昭2　内田幸夫(死亡)
　　昭13　松尾三郎(現)
　　昭16　三国文治郎(現)
　　昭18　近藤文治(常務・現)
　　昭26　木嶋　昭(教室・常任・退)
　　昭28　板谷良平(教室・常任・新)
　　昭30　岡田隆夫(教室・現)
　　昭31　小倉久直(教室・退)
　　昭33　田丸啓吉(教室・新)
　　講大10　荒井一郎(現)
　　講大14　神戸俊夫(現)
　　推薦　矢木原邦雄(常任・新)
　　(事務局)
幹事

東京支部
役員改選通知

平成3年度東京支部総会において左記の通り役員の改選がありましたのでご通知致します。

関西支部
役員改選通知

平成3年度関西支部総会において左記のとおり役員の改選がありましたのでご通知致します。

記

支部長　昭25　西岡　博(退任)
　　昭26　笹岡健三(新任)
副支部長　昭27　重本直三(新任)
総務幹事　昭46　高重哲夫(退任)
　　昭47　杉山　守(新任)
会計幹事　昭48　谷口治人(新任)

東京支部総会

平成3年6月1日(土)に、東京目黒の八芳園において東京支部総会、本部総会および東京支部・本部の合同懇親会を開催しました。小雨模様のあいにくの天気でありましたが、本部より大谷先生(会長代行)近藤先生(常任幹事)松波先生、矢木原事務局長および大嶋関西支部長、神戸幹事(デルタ会)の方々をお迎えして90名の参加を得て盛大に実施しました。

支部総会では、西岡支部長(昭和25年卒)の挨拶に続いて、高重総務幹事から、平成2年度の行事報告や決算報告を行い満場一致で

了承されました。引続き平成3年度の新役員をつぎのように選出しました。

支部長　笹岡建三(昭和26年卒)
副支部長　重本直三(昭和27年卒)
総務幹事　杉山　守(昭和47年卒)
会計幹事　谷口治人(昭和48年卒)

新役員選出後、笹岡新支部長の挨拶に引き続き、平成3年度の行事計画として、従来から活発な趣味の会に加えて、今年度から新たに「俳句会」(幹事・香川正明氏昭和23年卒)の発足、昭30～昭34卒のグループ会の発足が提案され、予算計画とともに了承されました。

次に今年米寿・喜寿を迎えられる会員(米寿1名、喜寿15名)のお祝いを行い、当日出席された4名の方には、新支部長より一人一人に目録が手渡されました。

次に近藤常任幹事の司会により、本部総会が開かれた。故松田洛友会長のご冥福をお祈りし黙祷を捧げるとともに、大谷先生から故松田会長の闊達な人柄、先見性が高かったこと等のお話を伺い亡き人柄を偲びました。また近藤先生から洛友会の運営の健全化を計るための会費の値上げが提案され、了承されました。また松波先生から最近の大学の近況として、先生が(林先生(定年退官)木嶋先生(定年退官)竹田先生(名大へ異動)他)の異動のお知らせや、最近の就職状況・修士博士への進学状況(博士過程への進学が少ない等)の詳細な説明を拝聴しました。

懇親会では東京支部の笹岡新支部長の開会の挨拶、近藤先生の乾杯で始まり、大嶋関西支部長のご挨拶(最近の関西の状況等)や、今年喜寿となられる方々4名から近況と健康維持のコツ等お話を楽しく伺うとともに、参加者間で大いに話が弾み盛況な懇親会となりました。午後7時40分すぎ、なごりはつきませんでしたが、重本新副支部長の終わりの挨拶により来年の再会を約して散会しました。

(杉山記)

各支部行事(予告)

一、中部支部行事

①懇親ゴルフコンペ　9月7日
名古屋グリーンCC　4組
会費　2万2千円

②家族同伴秋の例会
西国33ヶ所第33番結願の谷波山華厳寺と美濃の正倉院と呼ばれる横蔵寺に秋を訪ねます。
期日11月16日(土)AM9時半
集合名鉄メルサビルの西口
(瀬戸観光バス)
会費大人五千円、児童三千円

二、九州支部行事

○昼食会　8月28日(水)
場所　ぬうべるてんじん
天神ビル11F
TEL 092－721－三二六一
会費　2千円　遠方の方無料

事務局だより

梅雨の候、蒸し暑い日が続いておりますが、直ぐ盛夏、会員の皆様にはお元気で活躍のことお見舞い申し上げます。

当7月号は故松田会長の追悼号として企画いたし、多数の方々にご寄稿を賜りました。厚くお礼申し上げます。その折事務局の不手際でご迷惑を掛け、失礼のあったこと誠に申訳けなく深謝申し上げます。お陰様で発刊出来ましたこと報告致します。

東京支部役員の皆様にお世話を掛けました総会も無事終了致しました。各支部の総会も会員の皆様方のご協力で開催されました。

○5月25日北陸支部・岩瀬の松月にて佐々木教授出席
○5月29日九州支部・ホテルステーションプラザ玄海にて近藤常任幹事、石川教授出席
○5月30日中国支部・広島全日空ホテルにて近藤常任幹事、卯本教授出席
○6月1日東京支部・目黒八芳園にて(東京支部総会参照方)
○6月7日四国支部・高松の新常盤にて近藤常任幹事、小倉教授出席
○6月15日中部支部・名鉄グランドホテル、アイリスにて大谷副会長、板谷教授出席
○6月22日関西支部・ホテル京阪京橋、かがやきの間にて大谷副会長近藤常任幹事、安陪教授他出席
○6月12日北海道支部

支部総会報告は次の10月号に記載致します。

次に会員新名簿を本年11月下旬に発行します。ついては次項のお願いをぜひご協力賜りたい。

一、広告掲載の依頼。
会員企業の広告を各支部役員を通して依頼されます。多くのお申込みをお待ちしております。

二、会員基本調査票を記入ご返送の件。
新名簿には会員各位の記載事項を出来るだけ正確にするため本7月号に調査票を添付致しました。お手数ですが記入の上ご返送ください。特に住所・勤務先所属部課名役職は書いてください。
期限　8月20日まで

三、会費(新会費)振込方お願い。
総会にて承認された新会費振込用紙を7月号に添付致しております。新会費で至急振込み賜りますようお願い申し上げます。

(事務局長矢木原邦雄)

訃報

講大8　滝埜幾蔵　2・9・
昭元　片山辰雄　3・4・10
昭2　内田幸夫　3・5・2
昭4　鈴木亮三　3・3・
昭5　加茂忠恒　3・5・13
昭5　北脇保喜　3・1・6
昭8　戸山信芳　2・12・
講昭12　岩堀恭三　3・4・4
昭14　村松　博　3・1・2
昭15　中村四郎　2・12・17
講昭15　岸本輝三　3・5・9
昭19　尾坂卓夫

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。